「漢委奴國王」金印の複眼的研究

［日］石川日出志

1．問題の所在

「漢委奴國王」金印（図 1·5）は，西暦 1784（天明 4）年 2 月 23 日に九州島北部の志賀島で発見された。発見直後に亀井南冥が，『後漢書』の「建武中元二年倭奴國奉貢朝賀……（略）……光武賜以印綬」の印と鑑定した。南冥の判断は現在まで定説となっている。但し，江戸時代以来真贋論議が繰り返されており [1]，近年も，鈴木勉·三浦佑之両氏が，江戸時代に製作された可能性が高いと主張している [2]。一方，中国では，1981 年に江蘇省甘泉 2 号漢墓で「廣陵王璽」金印が発見されて，その印文の特徴が酷似することなどから，「漢委奴國王」金印を疑問視することはなくなり，東漢早期の標準資料と扱われている [3]。

日本では，江戸時代偽物説に対して高倉洋彰氏らの批判 [4] があるが，三浦·鈴木両氏は，現在もなお偽物説を主張する。日本の考古学界が東漢代製品とみるのは，岡崎敬氏が 1968 年にこの金印の詳細な計測を行って，印面四辺の平均が 2.347 ㎝であり，西暦 81 年製の建初尺（23.5 ㎝）の 1 寸に合致すると述べた見解 [5] を支持するからである。ところが，建初尺は出土品ではないという問題があった。それにも関わらず，これまで「漢委奴國王」金印に関する詳細な検討が行われておらず，これが偽物説を許容している。

実物資料としての「漢委奴國王」金印は，多角的·複眼的な検討が行われるべきである（図 1）。しかし，岡崎氏は金印の法量＝尺度の検討，三浦氏は出土情報に関する疑念，鈴木氏は東漢代の篆刻技術が江戸時代にも存在することを根拠とする主張である。

また，高倉氏の批判は，蛇鈕という形態情報，印文の構成によるものである。それぞれ主張の根拠が異なり，自らの根拠に全面依存する傾向がある。このような場合は，多角的·複眼的な検討を行って，それぞれどの程度の信頼性があるのか。また，相互に矛盾する点がないのかを考察することによって，はじめて問題を解決に導くことができる。

---

[1] 大谷光男：《研究史金印》，吉川弘文館，1974 年版。

[2] 鈴木勉：《ものづくりと日本文化》，橿原考古学研究所附属博物館選書（1），2004 年版，鈴木勉：『金印·誕生時空論』，雄山閣出版，2010 年版，三浦佑之：《金印偽造事件》，幻冬舎新書 015，2006 年版。

[3] 孫慰祖：《歴代璽印断代標準品図鑑》，吉林美術出版社，2010 年版，第 42 頁。

[4] 高倉洋彰：《漢の印制からみた『漢委奴國王』蛇鈕金印》，《国華》第 1341 號，2008 年版，第 5—15 頁。

[5] 岡崎敬：《『漢委奴國王』金印の測定》，《史淵》第 100 輯，1968 年版，（九州大学文学部考古学研究室 1：《志賀島》，1975 年度，第 84—92 頁）。

図１　“汉委奴国王”金印の复眼的研究

そこで，本発表では，まず岡崎氏の尺度論では，東漢代／江戸時代のいずれの製品であるかを決定することはできないことを確認する。次いで，金属組成の問題を採りあげ，さらに蛇鈕の形態，印文の特徴の検討を行う。その結果，相互にまったく矛盾する点がないことを確認する。そして，特に「漢委奴國王」の５字が東漢早期の特徴をよく示しており，その諸特徴を江戸時代に知ることは不可能であることから東漢早期の製品と結論づける。

なお，本研究の目的は，璽印の真贋判定ではない。璽印の多角的･複眼的研究を通して，古代における中国，および中国と周辺世界との関係史を読み解く資料として活用する条件を整えることにある。

２．尺度論の限界

岡崎氏は，東漢代の出土尺および現存する建初尺との照合によって，「漢委奴國王」金印の一辺が東漢代の１寸に合致することを根拠に，東漢代の印と判断した。江戸時代に東漢代の１寸が 2.35 ㎝であることは知り得ないと考えたからである。しかし，江戸時代の初期から，漢代の１尺･１寸の長さは復元されていた。

江戸時代初期の中村惕齋（1629-1702）は，『律尺考験･三器攷畧』で，和漢古今 10 種の尺を比較し，漢代および王莽代の銭貨の法量も検討して，漢尺を「唐尺七寸七分八氂二毫強」（23.57946 ㎝），すなわち１寸 2.358 ㎝と算出した。また，亀井南冥にやや遅れる狩谷棭斎（1775-1835）も，『本朝度量権衡攷』で，東漢尺を「曲尺七寸八分三氂三豪三絲二忽」（23.73496 ㎝）とし「慮虎銅尺建初六年八月十五日造」銘尺も図示して「其長サ曲尺七寸八分四氂四豪」（23.76732 ㎝）とする。それどころか，江戸時代には中国古代尺の模造が行われており，中村惕齋の監造による東京国立博物館蔵「新製周武王尺出」･「新製銅周尺出」，静嘉堂文庫蔵「新製銅周尺出」･「御府尺」の戦国代の尺の模造品が現存する。岡崎氏が根拠とした「慮虎銅尺建初六年八月十五日造」

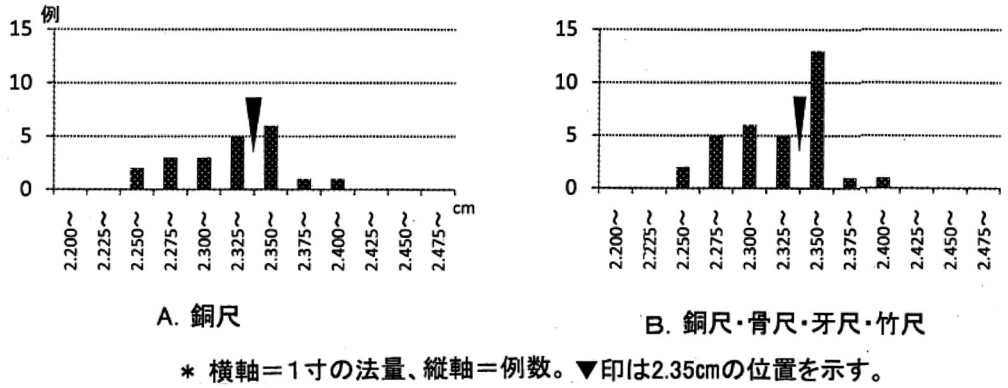

图２　遗迹出土尺の后汉代尺の１寸（『中国古代计量史』より作成）

銘尺も 12 点現存し，全長（１尺）平均 23.57 ㎝である [1]。江戸時代に，東漢の１寸が約 2.35 ㎝であることは知られていたのである。

しかし，遺跡で発掘された確かな資料も確認しておく必要がある。岡崎氏が集計した 1967 年時点では，漢代尺の出土例は 10 点，そのうち後漢代の実例は 5 例で，銅尺 4 点の平均が 2.341 ㎝，骨尺 1 点 2.33 ㎝で，5 点平均 2.339 ㎝であった。その後の出土資料の集計としては，国家計量総局『中国古代度量衡図集』（1981 年）がもっともまとまっており，戦国晩期から西晋代までの 48 点が収録され，そのうち東漢代が 33 点ある。１寸の値を 0.025 ㎝ごとに集計してその分布状況をみると，東漢代の出土尺の１寸は本来約 2.35 ㎝内外に集中する（図 2）。最新の研究成果である丘光明 [2]『中国古代計量史』（2012 年）も，両漢代の出土尺は 100 例近くにも上り，その半数以上が銅製で，西漢―新莽代は１尺 23 ㎝前後であったのが，後漢代になると約 23.5 ㎝に伸びると指摘する（75 頁）。

つまり，遺跡出土の東漢代尺の１寸は確かに 2.35 ㎝内外であり，なおかつ江戸時代にも東漢代の１寸が 2.35 ㎝であることが分かっていることから，尺度論で真贋論争を解決することはできない。

３．金属組成の問題

金属組成の問題については，従来議論の展開が不十分であった。岡崎（1968）は金印の比重も測定して 17.94 という値を得て，金と銅であれば金 5.265 ㎤·銅 0.79 ㎤ の比率になると復元した。岡崎は，金と銅の比率だけを復元したが，金と銀であればそれぞれの比重は 19.30 と 10.50 であるから，重量比で金：銀＝ 90.227：9.773 となる。1953 年に岡部長章も計測し，比重 18.1 と計測して金と銀の合金であれば，22.06 カラット（金：：銀＝ 91.917：8.083）とした値と近似する。また 1989 年には，本田光子らによって蛍光Ｘ線分析が行われ，金：銀：銅＝

[1]　岩田重雄：《中国における尺度の変化》，《計量史研究》第 1 巻第 2 号，1979 年版，第 1―37 頁。

[2]　丘光明：《中国古代計量史》，安徽科学技術出版社，2012 年版。

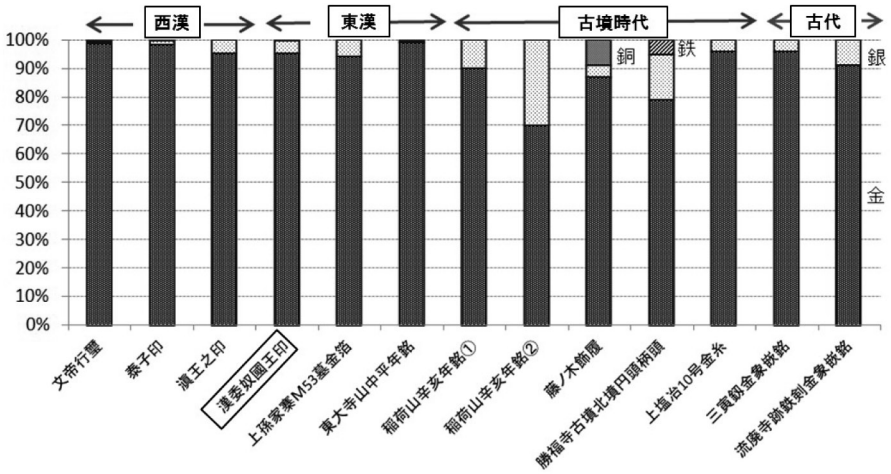

図３　中国西汉―日本古代の金制品の金属组成の推移

95.1：4.5：0.5という値が得られている（本田ほか1990）。このように，90―95％という分析結果が繰り返し提出されている。この値を中国古代以来各時代の金製品と比較するとどう判断できるのかも，金印の製作年代を判断する上で重要である。

そこで，各時代の遺跡から出土した金製品の金属組成を検討する（図３）。中国ではすでに戦国代および西漢代は金92―99％という高品位の金製品である。後漢末に下っても，青海省上孫家寨墓M 53墓の金箔で金：銀：銅＝93.90：5.64：0.1以下という事例があり，日本列島の古墳出土資料ながら東漢末の製品である奈良県東大寺山古墳出土の中平年（AD184-189）銘鉄刀の金象嵌は99.3―99.9％の高品位である。日本列島出土品では，古墳時代になると金の組成比が70―90％に低下するが，古代になると再び90％以上となる。こうした中国戦国代から日本古代の金製品の金属組成の推移からみて，「漢委奴國王」金印の値は東漢代の金製品として全く矛盾はない。しかも，江戸時代に東漢代の金製品の金純度は知り得ないのである。

４．蛇鈕の類型化と年代

蛇鈕が西漢代から晋代まで形態変化を遂げることは，すでに何人もの指摘がある[1]。しかし，蛇鈕をその形態的特徴をもとに類型化した上で，その時代性を検討した例はない。蛇鈕の実例を集成した上で類型分類するのが考古学の原則である。

蛇鈕の集成はまだ継続中であるが，これまで蛇鈕･虺鈕･蟠蛇鈕と報告された例や，鈕に蛇を表現した実例を56点確認している。このうち，画像がない例や，特徴を具体的につかめない例，玄武の一種と思われる例などを除いた40例を分類対象とする（表１）。これらは一連の系統的変遷が想定される資料群だが，他は例数が乏しいために系譜を復元することは困難である。戦国

[1]　大谷光男：《研究史金印》，吉川弘文館，1974年版，第144―148頁。金子修一：《隋唐の国際秩序と東アジア》，名著出版会，2001年度，第347―364頁。高倉洋彰：注4文献，など。

代の１例が最古で，新莽代の実例を欠くものの，西漢代から晋代に及ぶ。

分類基準は，分類作業の再現性を保証するために，明解である必要がある。そのため，（１）印台と鈕の接合状態，（２）蛇体の基本形態，（３）蛇体の細部形態の，３つの階層に基づいて，表２のように分類する。各分類の代表例を図４に各１･２例を掲示した。Ⅰ類は印台上に蛇形が独立して載るものである。ⅠＡ類は鼻鈕形の前後に蛇の頭部と尾部が屈曲し，ⅠＢ類は，蛇体が前から後方へ螺旋形を描く。ⅠＢ類の頭部がⅠＡ類のように前方ではなく脇を向く点や，尾部が渦形をなす点は，ⅡＡ１類へと継承される。Ⅱ類は，印台と蛇体が面的に付着するものである。ⅡＡ１類では，頭部と尾部が大きな渦形を呈するが，ⅡA2類では蛇体の横幅が狭くなり，頭部は渦形ではなく，後方に屈折するだけとなる。ⅡA2類は，鈕孔の前後に横凹線が走り，その周辺をよく見ると，本来駝鈕として製作されたものが蛇鈕に再加工されたことが分かる。ⅡＢ類は，蛇体の左右が平行線化したもので，ⅡB1類は頭部と尾部が胴部の左右に置かれるものである。ⅡB2類は頭部が前方上部に置かれるもので，蛇形というよりも駱駝や羊形に近いが，側面に螺旋形の溝を巡らすので蛇形だと分かる。ⅡＣ類は蛇体の上面観が円形に近くなり，頭部が中央上部に置かれるものである。いまだ例数が少ないが，一連の形態変化を知ることができる。

図４　蛇鈕類型の代表例

表１　蛇鈕印の諸例とその類型

No.	分類	印　文	印面	時代	素材	所蔵者	主要文献
1	ⅠA	臧柯信鈵		戦国	銅	上海博物館	孫1995：p. 144
2	ⅠA	浙江都水	田字格	秦	銅	上海博物館	孫2010a：p. 67
3	ⅠA	襄陰丞印	田字格	秦	銅	香港中文大学	孫2010b：p. 21
4	ⅠA	旃郎廚丞	田字格	秦	銅	故宮博物院	方2008：No. 38
5	ⅠA	白水弋丞	田字格	秦	銅	故宮博物院	方2008：No. 41
6	ⅠA	琅左鹽丞	田字格	秦	銅	上海博物館	孫1999：p. 43
7	ⅠA	字丞之印	田字格	秦	銅	上海博物館	荘・茅1999-No. 246
8	ⅠA	左礜桃支	田字格	秦	銅	天津芸術博物館	荘・茅1999-p. 36-239
9	ⅠA	冀丞之印	田字格	秦	銅	菅原石廬	菅原2004：No068
10	ⅠA	代馬丞印	田字格	秦	銅	故宮博物院	荘・茅1999：No. 250
11	ⅠA	彭城丞印	田字格	秦	銅	藤井有鄰館	大谷1974：pp. 144-14
12	ⅠA	雝丞之印	田字格	西漢	銅	故宮博物院	孫1993：No317
13	ⅠA	平陸丞印	田字格	西漢	銅	上海博物館	孫1999：p. 33
14	ⅠA	趙臨	半通印，有格	西漢	銅	故宮博物院	羅1982：p. 100-561
15	ⅠA	新淦丞印		西漢	銅	寧楽美術館	神田・田中1968：p. 39
16	ⅠA	犍為太守章		西漢	銅	寧楽美術館	金子2001：p. 354
17	ⅠB	滇王之印		西漢	金	中国国家博物館	雲南省博1959
18	ⅡA1	労邑執刲		西漢	琥珀	広西壮族自治区博物館	金子2001：p. 353
19	ⅡA2	漢委奴國王		東漢	金	福岡市博物館	名古屋市博1989：p. 71
20	ⅡA2	漢匈奴姑塗黒臺耆		東漢	銅	故宮博物院	羅1982:p. 68
21	ⅡB1	蛮夷里長		東漢	銅	藤井有鄰館	大谷1974：pp. 144
22	ⅡB1	漢叟邑長		東漢	銅	寧楽美術館	加藤1986a：p. 9
23	ⅡB2	漢夷邑長		東漢	銅	寧楽美術館	加藤1986a：p. 10
24	ⅡB2	魏蛮夷率善邑長		魏	銅	故宮博物院	羅1982：p. 70
25	ⅡB2	魏蛮夷率善仟長		魏	銅	上海博物館	孫2010a：p. 126
26	ⅡB2	魏蛮夷率善邑長		魏	銅	大谷大学図書館	大谷1974：pp. 144
27	ⅡB2	魏蛮夷率善邑長		魏	銅	二百蘭亭齋古銅印存	加藤1986b：p. 61
28	ⅡB2	晋蛮夷率善仟長		晋	銅	藤井有鄰館	大谷1974：pp. 144
29	ⅡB2	晋蛮夷率善仟長		晋	銅	上海博物館	孫1999：p. 131
30	ⅡB2	晋蛮夷率善佰長		晋	銅	大谷大学図書館（旧梅華堂蔵）	竹田1964：369
31	ⅡB2	晋蛮夷率善仟長		晋	銅	故宮博物院	方2008：p. 155
32	ⅡB2	晋蛮夷率善邑君		晋	銀	湖南省王鳳坪村	陳2004：p. 23・97
33	ⅡB2	晋蛮夷率善邑長		晋	銅	湖南省王鳳坪村	陳2004：p. 24・98
34	ⅡB2	晋蛮夷率善邑長		晋	銅	湖南省王鳳坪村	陳2004：p. 24・98
35	ⅡB2	晋蛮夷率邑長		晋	銅	大谷大学図書館	竹田1964：368
36	ⅡB2	晋蛮夷率善佰長		晋	銅	天津市芸術博物館	李1997：p. 70
37	ⅡC1	蛮夷邑長		魏	銅	故宮博物院	葉1997：p. 141
38	ⅡC1	親晋王印		晋	銅	故宮博物院	葉1997：p. 141
39	ⅡC2	呉蛮夷邑長		呉	銀	個人蔵	呉2013：No. 071
40	ⅡC3	蛮夷侯印		晋	金	湖南省平江県文物管理所	孫2010a：p. 141

表２　蛇鈕の類型分類

分類の３階層 1	2	3	分類基準：　階層１＝印台と鈕の接合状態，　階層２＝蛇体の基本形態，階層３＝蛇体の細部形態．	資料番号（表1）
Ⅰ	鈕の蛇体が独立して印台の上にのるもの．			—
	A		蛇体胴部が直線的なもの．幅狭い鼻鈕の前後に頭部と尾部が付き，頸と尾は屈曲する．	1～16
	B		蛇体が頭部から尾に向かって螺旋形をなす．鼻鈕形態を脱し、蛇体が明確に独立する。	17
Ⅱ	鈕の蛇体が印台と面的に付着するもの．			—
	A	蛇体の前後に頭と尾がそれぞれ螺旋形をなすか，反転するもの．		—
		1	頭部と尾部がともに渦形をなすもの．	18
		2	頭部が反転するものの渦形に至らないもの．駝鈕の再加工品．	19・20
	B	胴部が左右扁平で，蛇体の螺旋形が硬化したもの．		—
		1	胴部を上から見ると楕円形を呈し，頭部と尾部は左右反対側の側面に作出される．	21・22
		2	胴部の左右側面が直線的である．後方を向く頭部を前方上部に置き，尾部は後方上部に簡略に表現するか，不明瞭となる．	23～36
	C	蛇体の上面観が円形状をなすもの．頭部は鈕孔から上方に延びる．		—
		1	頭部が明確ではないもの．	37・38
		2	後方を向く頭部が鈕孔上方に置かれるもの．	39
		3	頭部を中央上方に作り，胴部から尾部へと螺旋形を描くもの．	40

以上の各類型の印文やその特徴による所属年代ごとの例数をみたのが表３である。まだ例数が少ない点は注意する必要はあるものの，〔Ⅰ A 類〕→〔Ⅰ B 類･Ⅱ A1 類〕→〔Ⅱ A2 類･Ⅱ B1 類〕→〔Ⅱ B2 類･Ⅱ C 類〕という変遷が確認できる。

「漢委奴國王」金印をこの類型分類と照合するとⅡ A2 類に属し，尾部の螺旋形の」明瞭さが図 4-5「漢匈奴姑塗黒臺者」銅印よりも図 4―4「労邑執刲」琥珀印に近いので，図 4-5 よりも古い特徴を留めることになる。

このように蛇鈕印の類型化とその変遷から，「漢委奴國王」金印の特徴は東漢代でも早い段階と判断できる。

表３　蛇鈕各類型の時期別例数

類型		戦国	秦	前漢	新	後漢	魏	晋
Ⅰ	A	1	10	5				
	B			1				
Ⅱ	A1			1				
	A2					2		
	B1					2		
	B2					1	4	9
	C1						1	1
	C2						1	
	C3							1

5．「漢委奴國王」字形の検討

最後に，「漢委奴國王」金印の印面に刻された５字の風格･字形細部の特徴から，どのように時期判断ができるかを検討する[1]。

まず「漢委奴國王」金印（図５下段：東漢早期 - 下）の「漢」字は，「氵」＝「水」字形に時期的な特徴がある。この金印の「漢」の「水」は，縦線が直線のように見えるが，詳細に観察すると，縦線３条の上部のみがごくわずかに左に曲がる。さらに左上の縦短線の下端が左に逆「L」字形に屈折する。両漢代の「水」字形の変遷（図５上段）を見ると，西漢中期（「西河馬丞」･「石洛侯印」，下段「汝南尉印」，図６「滇王之印」･「菑川王璽」）では縦線３条の屈曲は上部が強く，下部が緩い。それが西漢晩期（「廣漢大将軍章」･「卑梁國丞」，下段「汝南尉印」，図６「淮陽王璽」）から新莽代（「漢氏文園章」･「漢氏成園丞印」）へと直線化が進行し，東漢代の多く（「梁厩丞印」･「漢匈奴破虜長」･「漢叟邑長」）は直線となるが，東漢早期に曲線的傾向がわずかに残る（「泥陽尉印」，図６下段「楽浪大守掾王光之印」）。また，「水」字左上の縦線は西漢代では右上縦線よりも強く屈曲していた（「西河馬丞」）のが，西漢晩期から新莽代へと全体に直線化が進んだことによって，左上縦線のみが逆「L」字形となったもので，新莽代に多い（「漢氏文園章」）。したがってこの金印の「水」形は，新莽代―東漢早期に限定できる。

「委奴」２字を構成する「女」字は，両漢代の変化が緩やかであるために，この２字の判断がもっとも難しい。図５下段の下列に「女」字の下部が「己」を呈するもの，上列に「女」字の下部が緩やかな「S」字形を呈するものを配列した。そして「己」形を詳細に観察すると，「己」形上半の「コ」部と下半の「匚」部の縦幅は，西漢代では下半が幅広かった（「汝南尉印」２点）のが東漢代になると上下がほぼ同じ縦幅となる（「長安市長」）。同じことが，緩やかな「S」字形を呈する系列でも確認できる。この金印は，「奴」字の上半「コ」部が下半「匚」部よりも縦幅が広いのに対して，「委」字の「女」部は上下がほぼ等しい。「奴」字に西漢代の特徴を留めながら，「委」字に東漢代の特徴がみえる。また，この金印の「委奴」２字の「女」部の「己」形左側に垂下する縦線がともに緩い曲線を描く特徴は西漢―新莽代に共通する。東漢代になると直線傾向が強くなる。さらに，「女」字の上部の横「日」字形の上部横線が，「委」字では西漢的な曲線を描くのに，「奴」字では東漢代に顕著な直線となっている。このように，「女」字も西漢から東漢代への過渡的な特徴を確認できる。

「國」字が両漢代で明瞭に異なることについては，「國」字の「戈」部の第４画が，西漢代では横「L」字形なのが，東漢代になると「一」字形になると，すでに王人聰･葉其峯両氏が簡潔に指摘している[2]。しかし，第１･３画も明瞭に異なり，第１画は西漢代では右下がりなのが東漢代では水平になり，第３画も西漢代は曲線的なのが東漢代になると屈曲が強くなる（図６上

[1]　各印の細分時期は，次の文献に準拠したが、田字格印の多くを秦代に変更した。孫慰祖：《両漢官印匯考》，上海書画出版社，1993 年度。

[2]　王人聰･葉其峯：《秦漢魏晋南北朝官印研究》，香港中文大學文物館，1990 年度，第 58、101 頁。

図５　「氵」・「漢」（上）と「女」（下）の時期別比較（孫 1993 より作成）

段）。そこでこの金印の「國」の「戈」部を見ると，第１画は直線的だがわずかに右下がりとなり，第 3 画は緩い曲線，第 4 画は横「L」字形となる。第 1 画に東漢代の特徴が表れているが，第 3･4 画は西漢的であって，過渡的な特徴があることが分かる。

最後に，「王」字も両漢代で明瞭な違いがあることはよく知られている（図 6 下段）。「王」字を構成する 3 条の横線の中央が，西漢代では上方にある（「滇王之印」・「菑川王璽」・「淮陽王璽」・「東平王印」）のが，東漢代になると中央に位置するようになる（「廣陵王璽」，下段「楽浪大守掾王光之印」・「四角王印」・「汪陶長印」）。「漢委奴國王」金印の「王」字の場合は，ほぼ中央にあって東漢的である。ところが，3 条の横線の上下の縁線がわずかに曲線的な特徴をもっている。この特徴は，西漢晚期―東漢早期の「左奉翊掾王訴印」銅印や東漢早期の「廣陵王璽」金印・「楽浪大守掾王光之印」木印にもみられる。西漢代の「王」字の横線は直線が多いものの，

図 6　「國」（上）と「王」の時期別比較（孫 1993 より作成）

西漢代は各種の文字の横線が緩い曲線を描く特徴が「王」字に反映されたものと考えられる。「王」字もまた，西漢代から東漢代への過渡的特徴を備えていることが分かる。

以上のように，「漢委奴國王」5 字の特徴を詳細に検討すると，驚くべきことに，5 字すべてが西漢代から東漢代への過渡的特徴を確認することができる。そして 5 字ともそれぞれ一部に東漢代の特徴を備えているのはそれが東漢早期であるからだ，と判断できる。

しかし，以上の検討で用いた資料は，出土資料は墓葬での共伴遺物によって詳細な時期判断ができるが少数であり，多くの資料は出土情報が分からない。それを理由に，上記の判断を疑問視する人がいるかもしれない。もし，そうした懐疑的な意見が出てきた場合は，「漢委奴國王」金印を約四半世紀遡る資料との比較検討結果を示すことにしよう。その資料とは，2009 年に西

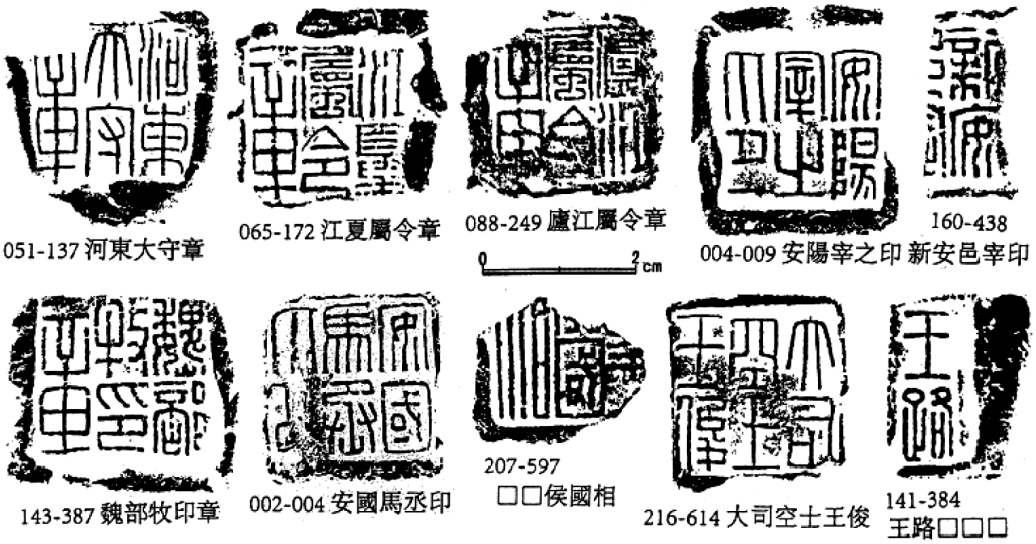

図７　新莽代の「氵」・「女」・「國」・「王」

安北郊の廬家口村で発見された新莽代の封泥群である[1]。図６は，「氵」＝「水」，「女」，「國」，「王」字の代表例を抜粋したものである。「氵」＝「水」字３点（「河東大守章」・「江夏屬令章」・「廬江屬令章」）は，上部の屈曲が強く，この金印よりも古い傾向が明瞭である。「女」字は，「女」下部が「己」形を呈する「魏」字（「魏部牧印章」）では「己」上半部は幅狭い。緩い「S」字形をなす「安」字３点（「安陽宰之印」・「新安邑宰印」・「安國馬丞印」）は「S」字の上部が小さい。ともに金印よりも古い特徴である。「國」字２点（「安國馬丞印」・「□□侯國相」）の第1·3·4画は，「漢委奴國王」金印に酷似する。2点例示した「王」（「大司空士土王」・「王路□□□」）は，中央の横線がやや上位にあり，「漢委奴國王」金印よりも古い特徴がある。このように，わずか約四半世紀しか時期差のない新莽封泥群と「漢委奴國王」金印との間には，きわめて近似する特徴がありながら，詳細を点検すると明確な違いを認めることができる。これら新莽代封泥群は，「漢委奴國王」金印の文字が東漢代早期の特徴をもつことを，はっきりと私たちに教えてくれる，きわめて重要な資料である。

６．結　論

以上，「漢委奴國王」金印という１点の実物資料を，複眼的な観点から検討を行った。それによって私は，この金印が東漢早期の製品である，と断定する。約2000年前に，現在の日本列島に住んでいた倭人の中の最有力者が，漢の光武帝に直接交渉をしたことを証明する重要資料であることに誤りはない。

[1]　馬驥：《新出新莽封泥選》，西泠印社·中國印學博物館，2016年度。

それとともに本発表で主張したいのは，璽印研究は多方面から検討を加えるべきであるという点である。そして，断代研究の上では，印文の特徴を詳細に検討することがきわめて重要であり，漢代では四半世紀―半世紀ほどの精度での判断が可能であることを再確認した。

最後に，１点の金印をわずか６年間しか研究していない私が，このような印学研究の最高峰で報告できるのは，生涯最高の栄誉であると感じる。孫慰祖先生および西泠印社に集う諸先生に心から深い感謝を申し述べたい。

【表１　蛇鈕印一覧参考文献】（発行年順）

雲南省博物館：《雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告》，文物出版社，1959 年度。

竹田淳照：《中国古印圖録》，大谷大学，1964 年度。

神田喜一郎·田中親美（監修）：《書道全集別巻 1 印譜中國》，平凡社，1968 年度。

大谷光男：《研究史金印》，吉川弘文館，1974 年版。

羅福頤：《故宮博物院蔵古璽印選》，文物出版社，1982 年度。

加藤慈雨楼：a）《漢魏晋蕃夷印彙例》·b）《漢魏六朝蕃夷印譜》，丹波屋，1986 年度。

名古屋市博物館：《中華人民共和国南京博物院名宝展》，毎日新聞社，1989 年度。

李東琬：《天津藝術博物館蔵古璽印選》，文物出版社，1997 年度。

葉其峯：《古璽印与古璽印鑑定》，文物出版社，1997 年度。

孫慰祖：《古印中所見的蛇》，《孫慰祖論印文稿》，上海書店出版社，1999（初出 1995）年度。

孫慰祖：《孫慰祖論印文稿》，上海書店出版社，1999 年度。

荘新興·茅子良：《中國篆刻璽印全集》1（璽印·上），上海書画出版社，1999 年度。

金子修一：《隋唐の国際秩序と東アジア》，名著刊行会，2001 年度。

菅原石廬：《鴨雄緑齋蔵中國古璽印精選》，アートライフ社，2004 年度。

陳松長：《湖南古代璽印》，上海辞書出版社，2004 年度。

方斌：《故宮収蔵官印》，紫禁城出版社，2008 年度。孫慰祖：《中国印章　歴史与芸術》，外文出版社，2010 年度。

呉硯君：《盛世璽印録》，藝文書院，2013 年度。

（作者系日本明治大学文学部教授）